令和７年１１月　校長室だより　　発行責任者　大阪市立高倉小学校長　阪口　篤

たかしょう

「学び合い」学習で育てたいこと

小中学校の頃、先生の授業がわからなくて困ったことはありませんでしたか？逆にもう知っているのに、ゆっくり授業が進むので退屈だと思ったことはないですか？

１人の先生が理解度の違う３０人以上の子どもを教えるのにはそもそも無理があります。そこで、高倉小学校ですすめているのが「学び合い」の授業です。

この写真は、４年３組で「学び合い」の授業をやっているところです。先生は、黒板に子ども全員の名前プレート（磁石）を貼り、今日の課題を提示します。（この日は、算数の教科書の１ページを指定）子どもたちはその課題を自分ですすめます。算数が得意な子が「できた」と言って黒板の自分の名前プレートを「できたよコーナー」に移動させます。できた子は「ちび先生」になり、わからない子のところに行って教えます。そうして、早くできた子が増えていくと、教室のあちこちで子ども同士の１対１個別指導が始まっていきます。

通常授業では先生に質問するのを躊躇していた子も１対１なら、ましてや友だちになら気軽に質問して教えてもらうことができます。「学び合い」授業中は立ち歩いてもおしゃべりしても自由なので、さらに気軽に教えてもらうことができます。

また、先生が教えるよりも子どもたち同士で教え合う方がわかりやすいという感想も聞かれます。実際、先生の話は難しすぎてわかりにくいことがあります。ちょうど私たちが大学教授の話が専門的すぎて理解できないのと同じです。先生は「子どもの知らない言葉」で課題を「非常に深く理解している」からいくら教えてもわかってもらえないということがよくあります。

「学び合い」授業の中で教える子どもは、課題はできたが理解が不十分なことも多いです。そういう子たちが「友だちに教えるため」にもう一度教科書を見直したり、問題を考え直したりして理解が深まっていきます。実は、友だちに教えるというアウトプットを通して教える子の学力もどんどん高まっていきます。

そして、この「学び合い」でいちばん大事なのは「友だちを見捨てない」という心情です。授業の初めに「クラスの全員が出された課題を理解すること」がゴールであることを明確に指示し、クラスの全員が課題を終わらせるために自分が何をすべきかを考えさせます。自分だけ「わかった」「できた」ではダメということです。

「わからないことを教えてと人に頼む力」「困っている人に気づく力」などは、これまでの教師主導の授業ではなかなか身につかない力です。友だちのことを気にかける優しさを持ってほしい。そんな「誰一人取り残さない」あたたかい雰囲気のクラスを全員で作ってほしい。人々のつながりが強い高倉地域で育った高倉小の子ならそれができるはずです。そのようなチームビルディングに貢献できる人こそが、今後あらゆる分野で必要とされる人であると思っています。